令和６年度
厚生労働科学研究費補助金（障害者政策総合研究事業）
分担研究報告書

手話療育支援者養成・育成プログラムの検討

研究分担者　伊藤　理絵　常葉大学　准教授
研究協力者　無藤　隆　　白梅学園大学　名誉教授

研究要旨　6 つのテーマ（「Audism への自覚」「子ども理解のための評価の観点」「親子のコミュニケーション支援」「絵本の読み聞かせ」「遊びの援助と展開」「支援者としての手話」）に基づいて、手話療育支援者養成・育成プログラムのモデル案を作成した。ろう・難聴者と聴者の支援者が対話を通して連携し、子どもの育ちと学びの連続性を保障していくための科目開発と支援・指導過程の記録方法を検討する必要性が示唆された。

Ａ．研究目的

ろう・難聴児教育では早期療育が重要であるが、聴覚障害の程度が様々なろう・難聴児を地域の保育環境で育てるための専門職養成は十分ではない。また、手話を主言語とする聴覚障害児には、独自の認知的傾向が見受けられるため、特に、聴者側の気づきを促す必要がある。

本研究では、手話療育支援者養成・育成プログラムを提案する。令和 6 年度は、地域の実情を踏まえた手話療育支援者養成・育成プログラムのモデル案を作成する。

Ｂ．研究方法

令和 5 年度では、手話療育支援者養成・育成プログラムのモデル案を作成するために、6 つのテーマを設定した（表 1）。令和 6 年度は、ろう・難聴児の思考スタイルに関連する文献を表１に基づいて整理した。

また、東北と関東の 2 つの聾学校で学校見学及び意見交換を実施し、家庭・園・施設・学校等で子どもの育ちを共有する記録

【全体目標】子ども理解に基づく手話療育支援を行うための基礎的な知識と実践力を習得する。		
【到達目標】		
1	Audismへの自覚	ろう・難聴児思考と聴者思考、それぞれの特徴について理解し、多くの人に手話に対する正しい理解を発信できる。
2	子ども理解のための評価の観点	子どもの生活における手話環境を保障するため、ろう・難聴児の言語発達を理解・評価することができる。
3	親子のコミュニケーション支援	家庭での親子のコミュニケーションを支えることができる。
4	絵本の読み聞かせ	手話による絵本の読み聞かせの技術と教材研究を行うための手話療育実践力を習得している。
5	遊びの援助と展開	手話を通して子どもと対話的に遊びを深めていくための関わりができる。
6	支援者としての手話	手話療育支援者として必要な手話を習得する。演習やオンラインを活用した講座等を通して、子どもや保護者対応に必要な基本的な手話を習得している。

表１　手話療育支援者養成・育成プログラムのテーマ

や研修の在り方について検討した。

（倫理面への配慮）

本年度は、手話療育支援者養成・育成プログラムモデル案を作成し、最終年度に向けて手話療育支援者養成・育成プログラムのモデルカリキュラム案を作成するための研究体制を整えるため、文献調査、現地視察及び意見交換を行った。

現地視察及び意見交換を実施する際は、協力校に目的について同意を得た上で、学校見学のスケジュールを組んでいただいた。協力校と現職者に対して、本研究の趣旨を文書と口頭で説明し、同意を得た範囲内で実施した。学会発表・論文化は、文献調査をはじめ、既に公開されている情報を活用した。

C．研究結果

ろう・難聴児の思考スタイルの独自性について具体的な様相を記述し、地域の実情に応じて創意工夫ができる手話療育支援者を養成・育成するためのプログラムモデル案を作成した（表２）。現行の保育士養成課程や子育て支援員研修、教職課程で習得する内容が聴者の日本語を基盤したカリキュラムとなっているため、基礎的事項は共通とした上で、手話療育に特化した科目開発が必要である。

なお、プログラムモデル案を作成するにあたり、参考にしたろう・難聴児の思考スタイルに関連する文献は以下の通りである。

1）バイリンガル・バイカルチュラルろう教育センター（監修）『聞こえなくても大丈夫！人工　内耳も手話も』株式会社ココ出版，2022 年

2）狩野桂子・森田明（著）『手話に関心があるすべての人のための知る・学ぶ・教える日本手話明晴学園メソッド』学事出版，2023 年

3）クァク・ジョンナン『日本手話とろう教育－日本語能力主義をこえて』生活書院，2017 年

4）松﨑丈（編著）『聴覚障害×当事者研究 「困りごと」から、自分や他者とつながる』金剛出版，2023 年

5）小野広祐・岡典栄（著）『日本手話へのパスポート：日本語を飛び出して日本手話の世界に行こう』小学館，2023 年

①Audismへの自覚	②ろう・難聴児理解のための方法と評価	③親子コミュニケーションの支援	④手話による読み聞かせの表現技術	⑤ろう・難聴児の遊びの援助と展開	⑥支援者としての手話
【全科目共通】乳幼児期を中心に、ろう・難聴児の思考スタイルを理解する。「ろう・難聴児にとってどうなのか」に常に立ち返る。聴者の保育者に対する気づきを促し、ろう・難聴者の保育者と連携できるようにする。 【実習時間（目安）】 30時間（6時間×5日間）以上					
音声言語と手話言語	ろう・難聴児の心理学 （家庭支援の心理学を含む）		ろう・難聴児の児童文化	ろう・難聴児保育の原理	言語環境保障論
言語環境論	ろう・難聴児の言語発達		教材研究 （※教材は絵本等の児童文化財）	ろう・難聴児の社会性の発達	言語環境保障演習
ろう・難聴児に対する早期支援の現状と課題	乳幼児期のろう・難聴児の理解と支援 （ろう重複障害児の理解と支援を含む）		表現技術演習	ろう・難聴児の生活と遊び	日本手話の言語発達心理学
ろう・難聴児保育・教育の現状と課題	ろう・難聴児とのコミュニケーション演習		NM・CL演習	遊びの計画・実践・評価（総論）	日本手話の文法構造
日本手話とろうアイデンティティ	ろう・難聴児理解の理論と方法	親子コミュニケーション支援（演習）	ごっこ遊び・劇遊び（演習）	遊びの計画・実践・評価（演習）	支援者としての手話演習 （地域資源の活用を含む）
ろう・難聴児の思考スタイル	ろう重複障害の理論と方法	ろう・難聴児の思考スタイルの理解と子育て	模擬保育	模擬保育	【実習】 生活と遊びの支援
ろう文化論	ろう・難聴児理解に基づく指導計画と評価	【実習】 コミュニケーション相談支援	【実習】表現技術実践 ※絵本や紙芝居等の児童文化財を使用した読み聞かせ（素話含む）	【実習】 遊びの計画・実践・評価	【実習】 家庭－園・学校－地域との連携

表２　手話療育支援者養成・育成プログラムモデル案

6）佐野愛子・佐々木倫子・田中瑞穂（編）『日本手話で学びたい！』ひつじ書房，2023 年
7）澤田利江（監修）『親子で学ぼう！もっとおぼえたい手話 話すことが楽しくなる「会話練習帳」』メイツ出版，2023 年
8）米内山明弘・森壮也・福島智・長棟まお「障害を通して考える」(pp.183-268)　山田宗睦（著者代表）『手は何のためにあるか』風人社，1990 年

D．考察

一人ひとりのろう・難聴児に応じて、地域の実情を踏まえた手話療育を行うためには、ろう・難聴保育者と聴者保育者との連携が不可欠である。そのため、現行の保育士養成課程や子育て支援員研修、教職課程のカリキュラムを参考にした上で、手話療育に特化した科目を含めたプログラムを検討した。

聴者の思考スタイルが基本になっている保育・教育を客観視するための気づきを促す養成・研修として、Audism（オーディズム，聴能主義，聴者/聴能至上主義）の自覚に関するプログラムが必要である。例えば、インターネットで自治体等が発信する情報について、非聴者の視点から見直す演習や、手話の「手」が言語であることを自覚することで、“手遊び”が聴者ベースの遊びになっていることへの気付きを促す演習、日本手話に特徴的な NM・CL 演習を取り入れることにより、保育表現技術を捉え直す等が考えられる。

現職者研修や保育士養成課程に所属する学生を対象とした養成の場合、ろう・難聴者と聴者が、保育所保育指針および幼保連携型認定こども園教育・保育要領を共通言語に対話できるプログラムは必須であろう。手話習得への配慮を重視するあまり、支援方針が無意識のうちに手話言語獲得に力点が置かれていたり、子どもの遊びが「言語獲得のための遊び」になったりしていないかを省察し、要領・指針を共通言語に対話的に改善していく専門性を養うことが重要であると思われる。

聴覚障害の程度にかかわらず、地域の実情に応じて 0 歳から連続性をもった子どもの育ちと学びを保障するためには、家庭・園・施設・学校等が一人ひとりの育ちと学びの記録を共有していく必要がある。

E. 結論

聴覚障害の程度も地域の実情も多様な中で、一人ひとりのろう・難聴児の経験を豊かにするための手話療育支援者養成・研修プログラムモデル案を作成した。ろう・難聴者と聴者の支援者が対話を通して、子どもの育ちと学びの連続性を 0 歳から保障していくためには、子どもの経験の過程を共有する記録の在り方を検討し、支援・指導記録を開発する必要性が示唆された。

F．研究発表

1.　論文発表

伊藤理絵 (2025) Audismの自覚から始まる保育者の質向上『乳幼児教育・保育者養成研究』第5号，pp.137-144.

2.　学会発表

伊藤理絵 (2024)「ろう・難聴児の手話療育支援者養成プログラムの検討」第20回子ども学会議（日本子ども学会学術集会）抄録集p.47.

G．知的財産権の出願・登録状況 なし